

phrase

フレーズ

[フレーズ] 東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 広報誌

[phrase] vol.03/2015.10 Issue/Tohoku Medical Megabank Organization

vol.03

[特集]

継承

—— 受け継がれ、また、生み出されるもの

被災地。それぞれの継承

ToMMo —— 地域に寄り添うところ

継承のphrase

[連載] 描くわたしと、描かれるわたし

[副機構長に訊く] 個人のゲノム、みんなのゲノム

phrase

フレーズ

[フレーズ] 東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 広報誌

[phrase] vol.03/2015.10 Issue/Tohoku Medical Megabank Organization

vol.03

何も手は打たれていず、
われわれには、
すべてをまた始めることが可能だ。

[クロード・レヴィ=ストロース]

▶Staff

Editor in Chief: 清水 修[東北大学 特任准教授]

Editors: 関根幸世[ToMMo 広報室]

戸田聡一郎[京都大学 助教]

Writers: 清水 修[東北大学 特任准教授]

関根幸世[ToMMo 広報室] (21p-column)

Art Director & Designer: 古田雅美[opportune design inc.]

Photographers: 森 栄喜(cover, 02-03p)

千葉健一

Illustrator: 本多志帆(22p)

▶Publisher

東北大学 東北メディカル・メガバンク機構

〒980-8573 仙台市青葉区星陵町2-1 / Tel. 022-717-8078

http://www.megabank.tohoku.ac.jp

発行日: 2015.10.16

印刷・製本: 今野印刷株式会社

©Tohoku Medical Megabank Organization

Printed in Japan



contents

[特集] 継承 ― 受け継がれ、また、生み出されるもの
被災地。それぞれの継承 …… 04

ToMMo ― 地域に寄り添うところ …… 18

継承のphrase …… 07, 11, 16

[連載] 描くわたしと、描かれるわたし …… 22

[副機構長に訊く] 個人のゲノム、みんなのゲノム …… 24

※インタビュー記事の中には、津波被害に関する生々しい表現が盛り込まれています。
閲覧時にはご注意ください。

▶取材協力

里見栄美[おひさま保育園 理事長]

小野寺雄志[復興屋台村・気仙沼横丁 事務局長]

村上健一[福よし 店主]

佐藤 賢[NPO法人 ピースジャム 代表]

気仙沼市民の皆さん(継承のphrase)

地域支援気仙沼センター、大崎センターの皆さん(継承のphrase)

▶執筆[ToMMo]

萩島創一 / 統合データベース室長(21p・ToMMo情報基盤 解説)

長神風二 / 広報戦略室長(連載)

▶談話[ToMMo]

清元秀泰 / 地域医療支援室長

中谷純 / ToMMo 教授

呉繁夫 / 副機構長

[先人のフレーズ・出典]

クロード・レヴィ=ストロース「悲しき熱帯」川田順造 訳

星野道夫「ノーザンライツ」

ジャン=ピエール・デュビュイ「ツナミの小形而上学」嶋崎正樹 訳

ジョルジョ・アガンベン「言葉と死」上村忠男 訳

東北大学 東北メディカル・メガバンク機構

[ToMMo]

東北大学 東北メディカル・メガバンク機構(略称:ToMMo)は「震災復興に取り組みながら未来型医療を築く」という目的のもと、東北大学に設置された組織です。具体的な取り組みとしては、沿岸被災地に医師を派遣する「地域医療支援」、被災地住民の健康を長期にわたって見守る「長期健康調査(ゲノムコホート調査)」、カルテの電子化を推進する「医療情報ICT化」、宮城・岩手両県15万人の生体試料・健康情報・遺伝情報を保存する「ゲノムバイオバンク構築」、遺伝情報に基づく未来型医療を担う人々を育成する「人材育成」を挙げるすることができます。ToMMoは、被災地に寄り添い、住民の健康を見守りながら、東北にゲノム医療研究拠点を築き、被災地を含む「東北の自立」を目指す組織です。

継承

受け継がれ、また、生み出されるもの



東日本大震災は、実に多くの「受け継がれるべきもの」を断ち切りました。
多くの「かけがえない命」を。多くの「築き上げた社会資本」を。そして、多くの「豊かな文化」を。
心に傷を抱えながら、眠れない夜を過ごしながら、どのように「断ち切られたもの」を再生、継承していくのか……。
被災地と呼ばれるこの地の人々はすでに答えを見つけつつあります。
劇的な経験が織りなす万感の思いを胸に、失われたものを再生し、途切れたものを継承する。
ここには、そんな生命力があふれているのです。

text by Osamu Shimizu / photograph by Eiki Mori

【継承のphrase】

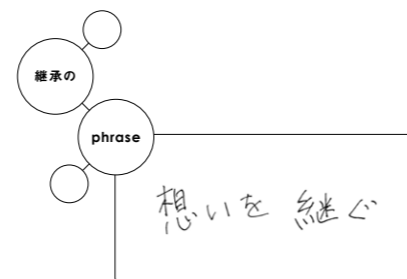
常に被災地とともに歩み続けるToMMoは、「被災地住民の健康の継承」のみならず、震災により途切れたあらゆる「人間の営為」が継承されていくことを願っています。そこで、今号では被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに「継承していきたいこと、もの」、「継承という言葉聞いて頭に思い浮かぶこと、もの」などを綴ってくださいとお願いして、実際に「継承のphrase」を手書きしていただきました。



いつも、亡き叔母の想いを胸に。

老舗の保育施設を襲った大津波は、真摯な園長をも連れ去りました。そのわずか2ヶ月後、園長の姪は施設の再興を実現します。あれから4年。子供たちの元気な笑い声が響き渡る園内には、今日も暖かな陽光がさんさんと降りそそいでいます。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba



はい、「おひさま保育園」です。子供を安心して預けられる明るくて暖かい場所……。この保育園の前身は私の叔母が経営していた「南気仙沼幼児園」という認可外の保育施設でした。認可外とはいえ、30年の歴史がある保育施設です。私は亡き叔母の遺志を継いで、「おひさま」を立ち上げたこととなります。

園児とともに避難。 安否確認の日々

4年前の東日本大震災の日、午前中に南気仙沼幼児園の手伝いに行き、午後は家におりました。あの強烈な揺れの直後、私は避難場所に指定されていた小学校に行き、避難した園児と職員の無事を確認すると、園に向かいました。園には誰もいませんでした。園児を迎えに来る親御さんのために「小学校の3階に避難しました」という貼り紙を貼って、小学校に引き返し、校舎に入ろうとしたら後ろから大津波が押し寄せてきました。

小学校の3階から、何度か外を見ているうちにものすごい状況になってきました。「助けて」と叫びながら人が流されていくんです。プロパンガスや家の玄関もそのまま流されていく。でも私にはどうすることもできない。とても現実とは思えない光景でした。園児には窓の外の様子を見せないように、部屋の中央に座らせて……。

震災当日の夜はそのまま園児や職員と避難所で過ごしました。雪が降ってきて寒かったので、教室のカーテンを子供たちの体に巻き、いただいたお煎餅をみんなで分けて食べていましたね。あの日、気仙沼ではガスタンクのオイルが流出して海が燃えたんです。その火がどんどん小学校に近づいてくる。覚悟しました。でも、幸い、火はこちらには来ませんでした。そういう状態で一晩を過ごし、2日目の昼に自衛隊に誘導されて高台のK-waveという体育館に移動しました。この時点で、南気仙沼幼児園の理事長だった叔母がどうしているのか、知る術はありませんでした。

後から、園児の親御さんから聞いた話なんですけど……。あの日の午前中に外出していた叔母は、地震の後に園に戻って待機し、園児



を引き取りに来る親御さんに「津波が来るので小学校に向かうように」と伝え続けていたらしいんですよ。実際、津波の直前に園に行った親御さんが叔母に会ったそうです。叔母は私と行き違いで園に戻って、親御さんのために待機していた……。そういう話を聞いてはいましたが、3月末に叔母の遺体確認をするまでは津波の犠牲になったと信じたくはありませんでした。どこかで生きていてほしいと、ずっと思っていました……。

2日目に高台に移ってから、私も職員たちも一旦、自宅に戻ることにしました。幸い、私の家と家族は無事でした。職員たちの家族と家も無事でした。

3日目からは私の家を拠点にして、園児とその家族の安否確認を始めました。皆で手分けして、小学校や市役所などの避難所を歩いて回りました。そして回っているうちに、何組かの無事だった親御さんから「自宅がどうなっているか見に行きたい。その間、子供を預かってくれないか」と言われたんです。この時、「必ず、園を再開しよう」と思いました。「おひさま」を作ろうと思った最初の瞬間でした。

キッズルームおひさまを開園

3月下旬、南気仙沼幼児園があった場所にやっと足を踏み入れることができました。すべて流されていて、跡形もありませんでした。その頃、園児の親御さんたちに集まっていたので、「これから、一時的にでもどこかで園を再開しようと思います。皆さん、入られますか?」と尋ねたんです。希望者は10人くらいでした。

4月に入ってから、場所探しと備品集めを始めました。場所を確保するために行政に掛け合いましたが、「南気仙沼幼児園はすでに事実上、閉園しているわけだから場所を貸すことができない」と断られてしまいました。備品の確保のためにユニセフにも掛け合いましたが、そちらも備品を供給してもらうことはできませんでした。それで、いろいろと検討した結果、竹の里さんというお食事処の倉庫をお借りできないかと思いついて……。竹の里さんは快く貸してくださいました。しかし、備品を集める術がありません。途方に暮れていたところ、知り合いの方が「3月に何度か気仙沼を支援してくださった山形の建設会社の会長さんがいる。手紙を書いてみてはどうか」と提案してくれました。さっそく手紙を書くと、支援しようとお返事をくださって。それで、5月の上旬に冷蔵庫、テレビ、電子レンジ、掃除機、パソコンなどをトラックに積んで持ってきてくださった

んです。すべて新品です。本当に有り難かったです。そして、2011年5月16日に「キッズルームおひさま」をオープンすることができました。震災から2ヶ月後なのに、よくオープンできたなど今でも思いますね。



新たな建物へ。 おひさま保育園に改称

ちょうど開園して1年が過ぎた頃、行政の監査が入りました。そして、「この保育施設は寝るところも食べるところもトイレも同じスペースにありますね。これ以上、この環境で続けていただくわけにはいきません」と言われてしまったんです。続けるなどと言われても、ここで閉園してしまっただけでは子供を預けている親御さんたちも困ってしまいます。何とかしなければと模索しているうちに、今度も、山形の会長さんが「新たに園を建ててあげるの、ちゃんと経営をしてみてもどうか」と言ってくださいました。

最初はとても迷いました。私自身は保育士ではありませんし、経営も経験がありません。叔母が経営していた園を手伝っていただけで。しかし、ここまできて終わりというわけにはいきませんでした……。預かっている子供たちと親御さんのためにも、今まで支援してくださった方々の思いに応えるためにも、会長さんの「子供たちを守りたい」というご厚意に応えるためにも、やらなければと思いました。

決心した後は、建物ができるまで、また、備品集めに奔走しました。倉庫を借りて一時的に運営していた今までは違って、ちゃんと保育施設を建ててやっていくわけですから、机、椅子、ピアノ、オルガン、黒板など保育施設に必要な備品を集めなければなりません。あちこ



ちに寄附・寄贈のお願いの手紙を書き、新聞をくまなく見て「あげます」という告知を見つけては連絡していました。

新たな建物が完成して「キッズルームおひさま」が現在、園があるこの場所に移ったのは2012年7月14日です。長く継続することが大切だと思ったので園児の定員は40名としました。その後、少しずつ園児は増えていき、現在は76名が在籍しています。また、2014年4月に「おひさま保育園」という名前に改称して現在に至っています。

「保育園」と名乗っているものの、実は、この保育園は認可を取っていません。認可を取ると入れなくなってしまう子供たちがいるからです。子供たちが認可保育園に入るためには一定の条件があるんですが、震災後も条件は緩みませんでした。この場所に移った当初、仮設住宅に住んでいる園児が20名ほどいました。仮設住宅に住んでいる園児のお父さんの中には、震災により職を失くして求職活動をしなければならない方が少なからずいらっしゃいました。お母さんが働きながら、お父さんは子育てをしつつ求職活動をしなくてはなりません。求職活動の場に子供を連れて行くわけにはいきませんから、当然、預かってほしいということになります。ところが、認可保育園では共稼ぎであるという条件があるために、お父さんの仕事が決まるまでは預かってくれないんですよ。叔母が理事長をやっていた南気仙沼幼稚園も「認可保育園に入れてもらえない子供たち」を預かるためにずっと認可外で運営していました。私も同じ思いです。



ここは最終的な「受け皿」。私立の、寺子屋をやるとなると「おひさま」を続けています。

子供たちの笑顔を取り戻すために

4年前、「おひさま」をスタートした頃は、仮設住宅から通ってくる園児が多く、仮設でなくても家が半壊したなど、被災した園児がほとんどでした。当時、子供たちはかなり震災のストレスを感じていただろうと思います。狭い仮設住宅に帰ると、お父さんとお母さんが今後の生活についてシリアスな話し合いをしている場に居合わせることも多かったでしょう。親御さんも大変だっただろうと思います。仮設住宅なので親子で遊ぶ庭もないし、夜泣きをすると近所迷惑なので車に乗せて近所を一周してこなければならぬ。身内を亡くされた辛さや被災生活の大変さに加えて、そういう子育ての大変さが加わってくる。働きながら子供を育てている若い親御さんを応援したいと思って「おひさま」を続けてきました。だから、園ではなるべく楽しい活動をしてもらって、笑顔を家庭に持ち帰ってもらおうと思っていました。子供が帰宅して「今日は〇〇をやったんだ」と笑顔でしゃべってくれば親御さんも自然に笑顔になるだろうから。

思えば、当初は子供たちが「ここに来れば楽しいんだ。毎日来たい」と思わせるために必死でした。ここは幼稚園ではないので学習・教育よりも「心を潤してあげること」、「笑顔を作ること」を主眼にいろいろとやっています。手遊び、お絵描き、音楽コンサート、体操教室、凧作り……。その甲斐があって、園児もあの頃とはすいぶん変わりましたね。実際、4年前は知らない大人が「おひさま」を訪れると、園児は怯えて泣いて大変でした。しかし、お菓子を持ってきてくださる方、コンサートを開いてくださる方など、いろいろな方々が支援してくださるうちに、子供たちは園を訪れる

大人が大好きになりました。「おひさまになる人は良い人ばかり」ということが分かったんだと思います。今では玄関から誰かが入ってくると、寄って行って、まわりついて、もう、放さない状態。その方が帰ろうとすると「帰らないで、帰らないで」と大騒ぎなんです(笑)。



20年先の園をみつめて

私は震災の1年前に母を亡くしたのですが、震災の3週間くらい前、母の一周忌をやった時に、叔母も出席してくれました。その時に、母の形見としてコートと時計を叔母に引き取ってもらいました。それで、震災当日の朝、叔母が母の形見のコートと時計を身につけて出勤して、職員たちに説明していたんです。「これは姉の形見なのよ」って。ほどなく叔母は外出しましたから、私も職員も最後に叔母を見たのはあの姿でした。その姿が私たちの記憶に残っていて、3月末に叔母の遺体確認をした時にもすぐに見つけることができました。偶然なんですけど……今、思えば、叔母は震災を予知していたのではないかと思うほどの偶然でした。あの日の時点で、叔母は70歳でした。私は今、54歳。だから、あと16年、叔母と同じ歳まで園を続けたいと思っています。叔母の遺志を継ぐという意味でも。

私の「継承のフレーズ」は「想いを継ぐ」。叔母の想いを継ぎ、これまで応援してくださったすべての方々の想いを継ぐために、子供たちの笑顔とともにがんばっていきたくと思っています。

[2015年2月19日。気仙沼・おひさま保育園にて]

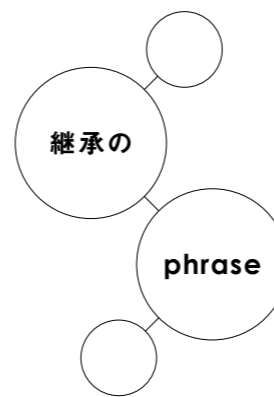
里見栄美:おひさま保育園理事長。気仙沼市出身。津波に連れ去られた叔母の遺志を継ぎ、震災後2ヶ月で「キッズルームおひさま」を開園。2014年に「おひさま保育園」と改称し、現在も70人以上の幼児を日々預かって施設運営を継続中。

Profile

継承のphrase

被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに「あなたが継承したいこと、継承していることを綴ってください」とお願いして、実際に「継承のphrase」を書き添えていただきました。

※このページでご紹介したお三方のインタビューは、今後、ToMMoウェブサイトにて、順次公開していく予定です。



あらゆる生命が、
ゆっくりと生まれ変わりながら、
終わりのない旅をしている。

[星野道夫]



尾崎智洋さん

(カフェK-port・店長)

震災の時点で、納棺師という職業をやっていました。震災後は何百体ものご遺体を納棺しました。その後もいろいろとあって……今になって考えれば、震災は人生が変わる大きなきっかけになったんだなとつくづく思います。

迎える心



漁業

菊田未来さん

(ToMMo地域支援気仙沼センター GMRC)

ちょうど、震災の時は看護師の仕事しながら、高等看護学校の学生でもありました。今思えば、震災後の混乱状態の病院で必死に働く状態から、学校の病院実習、卒論と気分的に落ち込む時間もないほど突っ走っていたなと思います。



YOGA

千葉瑠美子さん

(ヨガ・インストラクター)

震災前は「used & vintage chalumnae」という服屋を営みながら、「Chalumnae 3D fes」という音楽&ダンスイベントを定期的に開催していましたが、片浜在住の店舗、住居ともに全壊。震災後はyoga&フィットネスのインストラクターとして活動し、「chalumnae 3D fes」をyogaと融合する形で再開しました。



あの日から—— 駆け抜けた4年間の日々。

あの夜、妻を探して瓦礫だらけの道を歩き続けた記憶。死を覚悟した長い長い1日からの再出発。そして、父の死……。激変する人生に翻弄されつつも、彼が築き上げたコミュニティは、今、確実に気仙沼の地に根をおろしつつあるのです。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba



思えば、4年前のあの日、3月11日からずっと全力疾走してきたかんじです。非常時が今も続いている感覚……私は元々、飲食店を経営していて、その後、社交ダンスの競技ダンサーをやっていました。多くの被災者がそうだと思うんですが、私もあの日からがらりと運命が変わってしまった気がします。

砂埃で気づいた津波。妻を探しに

東日本大震災の地震の時は気仙沼の田谷地区にいました。「地球が終わったか」と思えるほどの激しい揺れで……とにかく、小学生の娘が心配でした。当時、南郷地区にある義父母(妻の両親)の家に娘を預けていたので、南郷まで走りました。距離は1kmくらい。義父母の家に着くと、娘はびーびー泣いていましたが、無事でした。義父母も無事でした。絶対に津波が来ると思ったので、義父母に「すぐに娘を連れて条南中学校に避難してください」と言い残し、義父母の家の自転車に乗って自宅へ向かいました。大川の橋を渡っている時に「大津波警報発令!」という防災行政無線が流れたんです。「津波警報は聞いたことがあるけれど、『大津波』って、なんだそれは」と思いましたね。

自宅に着くと、両親は無事。「すぐに南気仙沼小学校に避難してくれ」と言い残し、車を放置してきた田谷に自転車で戻りました。そして、車で条南中学校に行き、義父母、娘とともに高台のK-wave(体育施設)に向かいました。そこなら避難できると思ったからです。

K-waveからは海も町も見えないので確かめることはできなかったんですが、海側からどんどん砂埃が上がってきたので、もう津波が来ていると思いました。ほどなく夕方になって、砂埃がたっていた辺りの空が真っ赤に光り始めました。夕焼けではなく火事です。避難してきた人が「重油のタンクが流されて気仙沼湾が火の海になっている」と言っていました。陽が落ちてから、私と娘と義父母はK-waveから安全な叔母の家に移動しました。

妻にはいくら電話しても繋がりませんでした。妻の職場は鹿折(ししおり)のリバーサイド春團(以下、リバーサイド)という介護老人保健

施設。鹿折地区は町ごと流された所です。そして、まさに火の海のそば。私は妻を探しに行く決意をし、叔母の家から車で出発しました。

瓦礫を越え、津波の危機に遭遇しながら

叔母の家からリバーサイドまで10kmはあります。すでに夜になっていました。安波トンネルを抜けると、鹿折が燃えているのが視界に入りました。歩いている人に「避難所はどこですか」と聞いて、3箇所を避難所をすべて回りました。3箇所「リバーサイドの人、いますかー!」と大声で呼びかけても反応はなし。「妻はまだリバーサイドにいるんだな」と思いますが、助からなかったか……。とにかくリバーサイドに行くことにしました。

ある程度の所まで車で行き、そこからリバーサイドまで歩きました。1kmくらいなんですが、津波の瓦礫だらけ。瓦礫を越えながら歩いていくのでとても時間がかかりました。夜だから暗いんですが、火事なので明るい。ずっと「ザー、ザー」という津波の音が聞こえていました。堤防が決壊して新たな川ができてしまったところもあって、首まで水に浸かってその川を越えて行きました。

やっとの思いでリバーサイドに到着。1階の窓やエントランスのガラスが全部割れていて、中は瓦礫だらけ。とりあえず、建物の中に入り、大声で妻の名を呼んでみただけ、返事はありません。リバーサイドは2階建のビルだったんですが、2階に行く階段が分かりませんでした。真っ暗だったし。「一旦戻って懐中電灯を持ってきて探そう」と思って建物から出ました。

来た道を引き返そうと歩き始めたら、先ほどは膝くらいだった水が腰上くらいまでになっていました。「無理して戻ったら絶対、津波に飲まれる」と直感し、リバーサイドに引き返しました。水が来る前にリバーサイドの2階に外から登ろうと思ったんですが、その術がありません。仕方なく、壁をよじ登って柱につかまって、1階と2階の間まで行きました。その時、津波が川の堤防を越えてがーっと押し寄せてきたんです!「ああ、死ぬな」と思いましたね。娘に最後のムービーを残そうと思い、片手で携帯電話を取り出したんですが、「最後まで諦めずにいろいろ試そう」と思い直し、携帯をしまいました。よく見ると2階に続くスロープに瓦礫が溜まっている。壁伝いに何とかスロープのそばまで移動し、瓦礫のわずかな隙間を通り抜け、ついに2階へ。とりあえず助かったわけで

すが、今度は中に入れる所がない。2階はガラスが壊れていなかった。そのうち、1箇所だけ鍵が開いている窓を見つけて、そこから入りました。すると、室内にはたくさんのご遺体が……。すでにやって来た大津波に飲まれた入居者の方々のご遺体でした。

ようやく妻と再会。極限状態で過ごした夜

2階に入ってから、何度も大声で妻の名を呼びました。でも反応はありません。「また津波が来るかもしれない」と思って、フロアをうろうろしていると、突然、「ピンポーン!」という音が鳴りました。人が通ると鳴るセンサーがあったんですね、介護老人保険施設なので。何度も行ったり来たりしていたので、「ピンポーン!ピンポーン!」と鳴り続けました。すると、その音に気づいて奥から人が出てきたんです。

出てきたのはリバーサイドの職員さんでした。向こうも私に驚いていました。まさか、こんな状況で人が訪ねてくるとは思っていなかったでしょうから。妻が無事であるか尋ねると、「無事ですよ」とのこと。皆がいる部屋に案内され、ようやく妻と会うことができました。で、会って開口一番、言われた言葉が「何しにきたの?」。これには思わず脱力しましたねえ(笑)。

施設長から外の様子を聞かれたので詳細に話し、一緒に今後の対策を考えました。結局、「まだ津波も来ているから、ここで朝まで待とう」ということに。部屋は真っ暗。雪も降っていたし、全員濡れているので皆、寒がっていました。介護用の紙おむつを身体にたくさん巻いて、皆で身を寄せ合って暖を取りま



継承の

phrase

コミュニティ

した。海が燃えていて徐々に火が迫ってきます。その間も、ご高齢の入居者たちは低体温症で次々に亡くなっていきました。「火をおこそう」という話も出たんですが、館内が重油臭いので、それは危険でした。そのまま、何とか耐えて、やっと空が白んできて館内が見えるようになると、そこら中、泥だらけ。冷たい泥で体温を奪われるので、動ける人だけで懸命に泥かきをした記憶があります。それから、亡くなった方をきれいに並べて……。

帰還——家族の無事を確認

結局、朝10時頃になって消防団の方が助けに来てくれました。

私は妻の無事を家族に知らせるために叔母の家に帰ることにしました。妻をはじめとするリバーサイド職員は責任があるのでそのまま残り、生き残った居住者とともに鹿折中学校に避難して行きました。明るくなって、あらためて、来た道を見ると、「おれはどうやってこんなところを歩いてきたんだろう」と思えるほど、瓦礫だらけ。それでも何とか車まで戻って乗り、走り始めたらトンネルの前が道路封鎖されていました。警察官に交渉しましたが、通してもらえず、車を置いてトンネルの中を歩いて行きました。叔母の家まで10kmの道のりを歩いている途中で、知り合いに会いました。生きていた知り合い第1号ですよ。抱き合って喜び合いました。その方が車を持っていたので叔母の家まで送ってもらいました。すると、娘、義父母だけでなく両親も叔母の家に避難してきていました。全員に妻の無事を告げて、ようやく家族全員無事であることが確認されたわけです。

それにしても、「よく、おれは生きていたなあ」と思います。震災当日にあれだけの範囲を移動したのは、おそらく気仙沼の中でも私だけだったでしょうから。

ボランティアの日々から復興屋台村設立へ

3月12日以降、私たち家族は約2ヶ月間、叔母の家にお世話になりました。岩手の知り



合いがどんどん物資を届けてくれたので助かりましたね。妻はリバーサイドの方々とともに鹿折中学校に避難していたので、自転車で必要な物を持って行ったりしていました。

3月13日に自分の家を見に行きました。1階は瓦礫だらけでめちゃくちゃ。2階はなんとか浸水を免れたので、着替えなどの必要な物をゴミ袋に入れて何度か運び出しました。その後はずっとボランティアで気仙沼市内および陸前高田市の避難所に物資を配って歩く毎日を過ごしていました。

私の父は一級建築士だったんですが、震災後1週間目くらいから仕事を再開していました。仕事といってもボランティア。パソコンも何もないですから、電卓で構造計算をして鉛筆と定規だけで図面を引いていました。「気仙沼復興商店街・南町紫市場」は父が図面をひいたものです。叔母の家にいた2ヶ月の間に気仙沼復興協会が立ち上がり、父が代表理事になりました。そして、5月には「復興屋台村・気仙沼横丁」(以下、屋台村)を設立する話が持ち上がり、6月4日、なぜか私が事務局長に任命されてしまいました(笑)。何も分からずに6月7日に記者会見を行い、その日から4年後の今日に至るまで、屋台村の情報を全国に発信し続けているわけです。

5月に私と妻と娘の3人で叔母の家から千厩(せんまや)の雇用促進住宅に移りました。結局、ダンススタジオは流されて、自宅も住めないで壊れましたから、8月には雇用促進住宅から水梨小学校の仮設住宅に移りました。仮のスペースを借りてダンススタジオを再開したのは2011年の夏以降。その後、2012年7月にダンススタジオを正式に再建しました。

多忙な屋台村設立の準備。そして父の逝去

屋台村を立ち上げる作業は、まさに0から1を作り出す作業。とても大変でした。私は飲食店経営の経験があったし、父の影響で建築の図面引きもできたので、それを生かすことにしました。実際、「屋台村」の図面は私が引いています。朝の8時から夜中の2時頃ま

で屋台村立ち上げのために働く日々。当時は市役所も遅くまで仕事をしていて、夜中に市役所の人と打ち合わせをしていました。6月からずっとそんなかんじで、11月26日のグランドオープンに漕ぎ着けました。

そのグランドオープンの日……父が倒れました。トイレからずっと出てこないことに誰かが気づき、その後、病院に連れて行って検査をしたら……末期ガンでした。震災後、寝る間もなく仕事をしていたので、無理が祟ったのだろうとも思います。年が明けて2012年2月に亡くなりました。わずか3ヶ月。あっという間でした。母は一番悲しかったでしょうね。父の死後、とても辛そうでした。

2013年から競技ダンサーとしての活動も一応、再開しました。が、屋台村のほうの仕事が忙しく、その年にしたのは3試合だけ。2014年は1試合も出られませんでした。今後1年間くらいは屋台村中心に活動をしますが、徐々にスタジオや競技ダンスのほうも充実させていきたいと思っています。

私の継承のフレーズは「コミュニティ」。屋台村を設立して本当に良かったと思うことは一度崩壊したコミュニティが屋台村を核に蘇ってきたことです。実際、屋台村で再会できた人々も多かったはず。やはり、人はひとりでは生きていけないものだからね。

思えば、震災さえなければ、屋台村はなかったはずだし、父の死もなかったかもしれない……いろいろと人生が変わりました。もちろん、大変な日々を思い出さない日はないけれど……それでも私たちは生きていかねばならない。これからも娘の成長を見守りながら遅く生きていきたいと思っています。

[2015年3月24日。気仙沼・Yasse Coffeeにて]



小野寺雄志:気仙沼市出身。飲食店経営を経て、社交ダンスの競技ダンサーに。震災後は復興屋台村・気仙沼横丁の事務局長に就任し、津波で崩壊した気仙沼の街に新たなコミュニティを立ち上げるべく日々、奮闘している。一女の父。

Profile

継承の

phrase



熊谷牧子さん
(シャークス・店長)

震災で勤めていた会社が流され、失業。しかし、一念発起して起業を決意。サメグッズ専門店であるこの店を設立しました。震災後の経験を通して、感謝をすること自体が自分の力の源になっていることに気づきました。

感謝のデカラ



千葉美由紀さん
(キングスガーデン宮城・訪問看護ステーション所長)

私たちの訪問看護ステーションでは利用者のうち、30人が震災の犠牲となりました。仕事は一時的に中断しましたが、震災の1週間目から再開。ライフラインが復旧していない状態で、人力で黙々と看護していた時期を今でも思い出します。

寄り添う心

未来はあるいは私たちを必要としていないかもしれない。だが私たちは未来を必要とする。未来こそが、私たちのあらゆる行いに意味を与えるのだから。

[ジャン=ピエール・デュビュイ]

被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに「あなたが継承したいこと、継承していることを綴ってください」とお願いして、実際に「継承のphrase」を手書きしていただきました。



佐藤梨華さん
(気仙沼さいがいFMパーソナリティ)

私は被災しませんが、彼(現在の夫)が気仙沼で被災。その後、結婚して私も気仙沼に移り住みました。現在はみなし仮設住宅で暮らしています。被災された方と話す時、自分は当事者ではないということをひしひしと感じます。

ありがとう



小野寺俊介さん
(内装会社勤務)

震災の時は家族も家も無事でしたが、1年後、私は病に倒れ、手術をしました。その後、3回ほど入院を繰り返し、現在に至っています。現在は、のんびりと、ゆっくりと生きていきたいと強く思うようになりました。

家系 Family

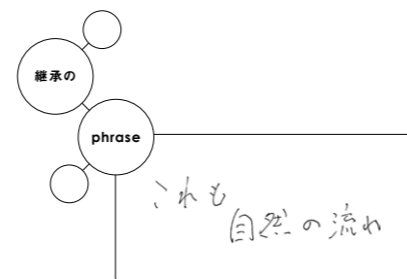
※このページでご紹介した四名のインタビューは、今後、ToMMoウェブサイト、順次公開していく予定です。



あえて、海のそばに「心」を移して。

大津波に見舞われながらも見事、再興を果たした日本料理店「福よし」。店主自らが図面を引いた新店舗は、震災前の店よりも海の近くにあり。一旦途切れた長年の歴史を再び繋げ、暖簾を継承していくということ。この地に根づいたたしかな味は今日も気仙沼市民の舌を楽しませています。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba



震災の前はね、道路一本挟んで向こうに店があったんですよ。津波で流れちゃった後に海に近い場所に新しい店を建てた。それがここです。私と妻と弟の3人で店を開いたのが昭和53年……もう37年もやってるから、そう簡単に潰すわけにはいかないよ(笑)。

現実とは思えない光景をただ、見つめた日

4年前の3月11日、地震が起こった時は仕込みの最中でした。店が潰れるんじゃないかというほどの揺れで立っていらなかったな。直感的に「これは津波が来るな」と思ったので、息子に「車を高台に持っていけ」と指示しました。弟は中学校に娘を迎えに行きました。私は大事な書類をせっせと2階に運んでね。金庫は重くて動かせませんでした。何度か2階に書類を運んでいる間に町内放送で「津波が襲来します」と言っているのが聞こえました。それで、軽トラックに乗り、高台に避難したんです。

避難して15分後に津波が来ました。ずっと見ていたんだけど、悲しいとか悲惨とか、そういう感情は起こらなかったな。たとえば、映画「十戒」(編集部註:1956年制作の米国映画。チャールトン・ヘストン主演)で海が割れるシーンを見た時のような感触。現実とは思えない光景が目の前に現れていました。大型漁船が電柱をなぎ倒して流されていく。家が形を残したまま、そっくり流されていく。

その後、暗くなってきたので線路を歩いて帰宅しました。自宅は無事。家族も無事。その日は弟家族もうちに泊まりました。

津波は2日以上続いていたと思います。1回や2回じゃないね。小さな津波も含めれば何度も何度も。何日か経って、店を見に行ったら、一見、何事もなく建っているように見えたけれど、よく見ると、一度、水に浮いて基礎からずれたところに固定されていました。このままでは、もう店は使えないなと思いましたね。その後はひたすら店内の瓦礫撤去。何ヶ月も撤去や掃除をしていました。

以前よりも海の近くに店を再建

店の備品はほとんど使えなくなっていました。包丁も錆びていたし、食器も泥だらけ。泥を洗っても油が取れない。海に重油が流れ出していたからね。だから、ほとんど廃棄です。カウンターは店を作り変えても使えるように取り外せるようになっていました。取り外して、川に持って行って洗ってシートをかけて保管。新た

に店を作る時にカンナをかけて現在も使っています。

2011年の夏、所用で何度か唐桑に行きましたが、津波でぐしゃっと潰された家がありました。潰れていたけれど、2階はそのまま残されている。いわゆる古民家ですね。何度かその前を通るうちに「その家の部材を福よし再建に使わせてもらえないだろうか」と思い始めました。その家の持ち主に「潰すのであれば部材をいただけないか」と掛け合うと快諾してくれました。以後、炎天下の中、弟、息子とともに何度も軽トラックで往復して必要な部材をもらってきました。現在、この店の柱などに使われています。

そんなふうに部材集めをしている間に市役所に行って「新たな店を作りたい」と相談しました。震災後、まだ3ヶ月くらいの頃だったから、市役所もごった返しててね。「住むのは大丈夫。店だけならいいけれど、今後の都市計画などによって立ち退きになる可能性もある」と言うので、それでもいいと思って店を作ることになりました。

たまたま海の目の前に土地があったので、新しい店は前の店よりも海に近い場所に建てました。1階は駐車場、2階がお店。店の図面は自分で引いたんです。一部屋一部屋全部決めて、調理場、囲炉裏、小上がりも決めて建築会社に渡して。部材集めをしていたのが2011年の夏。秋には図面を引いて、2012年8月にオープンしました。

津波は流された人だけでなく残された人にも苦しみを与え続ける

私の親戚全体では、13軒の家が流されてひとり、亡くなっています。でも友人たちと比べると被害は少ないほうでした。友人の中には6人亡くなった8人亡くなったという人々がたくさんいるからね。亡くなった方々のことを思ったら、私らは何も言えません……ただ頭を垂れるだけ。沈黙するしかない。分かったふりはできないからね……。

今、気仙沼を見て思うけれど、5年や10年で復興はできないだろうと思いますよ。もちろん建物は新たに建つだろうけど、そこに人の



生活の場を築くことは容易ではない。

とりあえずは通常に戻ったようにも見えるよね、気仙沼。でも「今が普通か」と聞かれば、私は「普通ではない」と答えます。地元の人口は減ったし、店の客層も変わっている。飲食店の店主が自殺したという話もたまに聞くね。被災しなくても客足が途絶えて店が立ち行かなくなることもある。津波は、流された人だけでなく、残された人にも苦しみを与えている。当初は、みんな被災者で、みんな同じように大変だったけれど、今はほとんど個人差が出てくるはずですよ。

大いなる自然の流れに乗って

でもね……津波が来ても私の人生が途切れるわけではなかった。たまたま私の人生の中に津波が入ってきただけで、人生そのものは過去からずっとつながっている。人間の想像力には限界があるから、あんなことが起こるなんて誰も想像していなかったですよ。でも、よくよく考えてみれば、巨大な隕石ひとつで恐竜は絶滅してしまったそうだし、私たちの想像の範囲を超えて出来事は起こる。そういう予期せぬ出来事が起こったけれど、幸い命は助かった。だから、私の人生においては津波の前と後で「途切れ」があるわけではない。どれだけ人生が変化しようとも自然の流れに乗って人生は続いている。もし、継承されていくことがあるとするならば、そういう大きな自然の流れしかないんじゃないかなと、今は思っています。

[2015年2月18日。気仙沼・福よしにて]

村上健一:昭和53(1978)年に日本料理店「福よし」を開店。以後、地元の名店として広く市民に知られる存在となった。東日本大震災の大津波により、店は壊滅。しかし、翌2012年には再興を果たす。現在の内装には被災を経た旧店舗のカウンターがそのまま使われている。



ともに、命をつなぐための行動を。

津波の犠牲となったご遺体を前にして「なぜ、自分は生きているんだろう」と思った瞬間。被災後の「地獄」に抗うための彼の行動はその想いから始まりました。「赤ちゃんのお腹を空かせない」から「若い母親のための職場づくり」へ。命を継承するために、今も、新たな挑戦は続いています。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

ええ、震災の前日まで普通に営業していたんですよ。「ルードジャム」というバーをやっていました。震災前は、気仙沼の美しい自然と気の合う仲間たちに囲まれた楽しい日々がずっと続くと思っていたね……。

限りなく死が身近にあったあの時

東日本大震災の地震が来た時は、自宅にいました。揺れはかなり激しくて、妻が「津波が来るから逃げよう」と言い始めたんです。とりあえず妻と娘と3人で「市民の森」に避難しました。到着して海のほうを見たら白波が立っていました。今、思えば、それが津波だったんですね。5時を過ぎて、市民の森から車で自宅へ。途中、路面がすごく濡れていて魚が転がっていました。「変だな」と思いつつ、濡れている路面に進入したら突然、車が半分くらい水に沈んで。あわててバックして、自宅に帰らず、気仙沼高校に避難しました。

避難所には津波で泥だらけになった人々が続々と到着していました。ラジオのニュースが「仙台荒浜では200体の遺体が上がった」と報じていました。

翌朝、店の状態を見に行きました。その途中で、けっこうな数のご遺体を見たんですね。瓦礫に挟まれているなど、見ていて辛くなるご遺体も多かったです。ご遺体を見ながら店まで歩いていくうちに「自分は今、なんで生きているんだろう」と思い始めました。この大津波なら、どこにいても亡くなる可能性はあったのに、今、自分は生きている……「死」がとても身近にありました。そういうことをずっと考えながら店に歩いて行ったんです。

店は跡形もありませんでした。ただ、トイレだけ半分残っていて、ブルースのCDが一枚、刺さっていました。あのくらい何もなくなると、もう笑えてきますね。なぜか、すんなりと事実を受け入れた自分がいました。

赤ちゃんのお腹は空かせない という思い

跡形もなくなった店を確認して帰宅すると、妻から「粉ミルクを買ってきてほしい」と言わ



れました。バイパス沿いのドラッグストアに行く、店の外まで長蛇の列ができていました。サンダルばきで避難してきた若いお母さんが赤ちゃんを抱いて、店の人と押し問答をしているんです。「粉ミルクはもう品切れです」、「本当はあるんでしょ？ 売ってください」って。よく聞いていると、「私、母乳が出ないんです！」って言っている。その言葉を聞いた瞬間、「これって地獄じゃないか」と思いました。この状況が赤ちゃんの餓死に繋がってしまったら、まさに地獄じゃないか……だから震災前日の店の売上金を持って買い出しに行くことにしました。お母さんたちの避難場所を聞いてから、車で古川に行き、赤ちゃん用品店で粉ミルクや紙おむつ、お尻ふきを買いました。避難所を回って粉ミルクや紙おむつを配って。ともあれ、その日は赤ちゃんのお腹を満たすことができたわけです。

子連れで働ける場所を創出

でも、このままでは同じことが起こると思いました。それに、不足しているのは粉ミルクだけじゃないはず。そこで、友人や知り合いに声をかけて、全戸訪問してニーズ調査をすることにしました。集まってくれたのは男性15名。震災直後、避難所には物資がどんどん集まってきましたが、一般住宅には渡りにくい状況でした。15名のチームには「ピースジャム」という通り名をつけました。そのほうが皆さん覚えてくれますからね。

ニーズ調査をしながら、その結果をインターネットに上げました。すると、全国から2000件くらいのアクセスがあって、多くの方が「粉ミルクや紙おむつを買って送るから配ってほしい」と書き込んでくださって。おかげで、物資がどんどん送られてきて、ぼくらはひたすら配っていました。2011年はずっとその活動をしていた記憶があります。

2011年6月くらいには義捐金の話題が出るようになりました。でも、お金を支援されても、働けなければ生活費として使って終わってしまう。若いお母さんたちの間では「働きたい」という方が多かったんです。いろいろな企業に掛け合って若いお母さんが子連れで働ける場所を探しました。でも、ひとつもなかったですね……それで「働ける場所がないなら作ればいい。ぼくらはピースジャムだからジャムを作る職場を作ろう」ということになりました。当時、宮城県でも原発事故の風評被害で、放射線基準値をクリアしているのに野菜が売れない状況でした。そういう安全な野菜を使って野菜ジャムを作ろうということで、3人の若

いお母さんがジャムを作り、2011年10月から売り始めたんです。

ジャム作りをするお母さんはすぐに3人から5人に増えました。また、2012年1月にはシュシュや巾着を作って売り始めました。そして、2012年5月にはピースジャムをNPO法人にしました。さらに、英国の伝統的な赤ちゃん用万能布であるベビーモスリンを製造販売し始めました。

その後、2014年9月に、事業場として、このピースジャム工房を建築しました。

先達の開拓精神を受け継いで

この4年間、ずっと「赤ちゃんのお腹は空かせない」というポリシーを持って突き進んできました……よく「人間が自然(災害)に抗えるわけがない」と言われますよね。でも、被災後に命を生き永らえさせることは、人の力でできるんじゃないかなと思うんです。それには、何も無いところから思い描いて大胆に行動していくことが大事だなと思います。開拓精神。たまたまぼくは震災後にそういう気持ちでやってきましたが、長い歴史の中で、多くの先達もきっと同じ思いでやってきたのだらうなとは思っています。

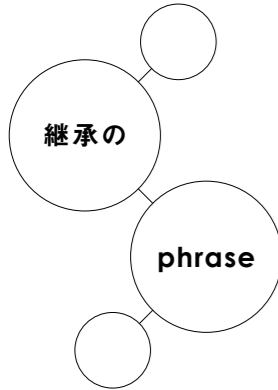
[2015年2月20日。気仙沼・ピースジャム工房にて]



佐藤賢:気仙沼市出身。震災前は「ルードジャム」というブルースバーを経営。被災後、赤ちゃんに粉ミルクを届けるボランティア活動からNPO法人「ピースジャム」を設立。若い母親がジャム作りや布製小物作りをして働ける職場、ピースジャム工房を始動し、活動中。

継承のphrase

被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに「あなたが継承したいこと、継承していることを綴ってください」とお願いして、実際に「継承のphrase」を手書きしていただきました。



彼らの生命はあなたを敬ってきた。
そして彼らの行いの中に
あなたはなおも生きている。

[ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル]

泉弘子さん・旺士郎くん
(ピースジャム職員)

震災によって子供たちの人生が変わってしまったなという気がします。子供たちには、日本人としての心得を受け継いでいってほしいと思っています。



心得

鈴木伸さん
(看護師)

津波の経験をして「もう海はいやだ」という方も多いですが、もう一度、海の魅力をみんなに知ってほしいです。みんな、ずっと海とともに生きてきたから。



海とともに生きる。

松田憲一さん
(ToMMo地域支援気仙沼センター-GMRC)

震災では義母を亡くしました。この4年間はみんな本当に大変だったけれど、気仙沼は少しずつ日常を取り戻しつつあります。



生きざま

佐藤博一さん
(ToMMo地域支援大崎センター-GMRC)

震災から4年経って思うことは「未来を見据えた街づくりをしてほしい」ということです。復興はなかなか目に見えてこないですね。



より良い人生へ

阿部典子さん
(ピースジャム職員)

親から子へ受け継ぎたいのは「手」。優しく子供をなでる手、手仕事の魅力など、「手」は人の真心を象徴しているものだと思いますから。



手

白幡日出男さん
(居酒屋びんぼん・店主)

34年間、この店をやっています。震災では2階まで水が入りましたが、半年後に仮オープン。この街が元に戻るまで、ここで店をやっていきますよ。



人類みな兄弟 心と心

玉木加寿也さん
(美容師)

震災でお店(美容室)が壊滅。でも、2ヶ月後には営業を再開しました。気仙沼がとてもおもしろい土地であることを多くの方に知ってほしいと思っています。



気仙沼

小野寺香央里さん
(ToMMo地域支援気仙沼センター-GMRC)

津波被害に遭いました。祖父が犠牲となり、家は流失。忘れたい人もいるだろうけれど、震災の記憶は受け継いでいかなければと思っています。



震災の記憶

千葉千晴さん・美玖ちゃん
(ピースジャム職員)

あの震災の日から人生が少し変わりました。町の風景が変わるなど辛いこともあったけど、震災があったからこそその出会いもありました。



母の味

小野寺恵美さん
(ToMMo地域支援気仙沼センター-GMRC)

震災で家は半壊。その時、お腹には双子の子を宿していましたが、無事出産しました。いつも、自分から子供へ笑顔のリレーをしたいと思っています。



笑顔

海老原雄紀さん
(気仙沼市職員・当時)

2年半にわたって災害公営住宅の計画・設計をしてきました。住宅の完成を待ち続けている方々がたくさんいらっしゃったので、プレッシャーもありましたね。



住まい

及川勇さん
(バー プレジャー・店主)

震災ではカウンターまで水が来ましたが、1ヶ月後に店を再開。電気が復旧してなくて、バイクのエンジンをかけてそのライトを照明にしていました。



人

畠山あすかさん
(ToMMo地域支援気仙沼センター-GMRC)

ToMMo長期健康調査に携わることで、皆さんの健康づくりのお手伝いができることに喜びを感じています。



素直さ

後藤秀治さん
(sea candle coffee・店主)

震災後、気仙沼に戻ってカフェを始めました。気仙沼というところはとても豊かな自然に祝福された土地。それが最大の魅力ですね。



大自然

日野郁夫さん
(居酒屋ひのき・店主)

震災後、東京に出ようと思いましたが、子供が「転校したくない」と言うので、気仙沼でこの店を始めました。「家」を大切にしていきたいと思っています。



家

菊川毅さん
(ToMMo地域支援大崎センター-GMRC)

復興に携わりたいと思い、ToMMo GMRCになりました。未来は「今」の積み重ねだと思うので、精一杯、「今」を生きていきたいと思っています。



今も生きる

そして、どこまでも共に歩んで。

震災直後、東北大学の医師たちは石巻、気仙沼の地に駆けつけ、野戦病院さながらの地元医療機関で懸命の支援を行いました。

あの時、くるぶしまで泥に浸かって病院にたどり着いた医師は、今も絶え間なく医療支援を続けています。

ToMMo — 地域に寄り添うところ



実は、阪神・淡路大震災と東日本大震災、両方の医療支援を経験してるんですよ。もう、これは天命なんだと思っています。

阪神・淡路大震災が起きた1995年1月17日、僕は若手医師として米国に留学中でした。TVを見ていた時突然、臨時ニュースが入り、「神戸で巨大な地震発生」というテロップが流れて……すぐに実家に電話をしましたが繋がらず、そのまま一時帰国。神戸の家は全壊でしたが、幸い家族は姫路の家にいて無事でした。その後、母校香川大学の医療支援のメンバーに加わり、クラッシュシンドローム後の急性腎不全症例を大学病院で受け入れました。クラッシュシンドロームとは「建物の倒壊等で下敷きになった筋肉が潰れ、その後、血流が再開すると急性腎不全に陥る」という疾患で緊急透析が必要なのです。しばらくその透析支援シフトで働いて、米国に戻りました。

仙台へ。そして、石巻へ。 駆けつけた日々

それから16年後……僕は東北大学医学部で医師、研究者をしていました。東日本大震災が発生した2011年3月11日には仙台にはおらず、講演のために高松にいました。ホテルでTVをつけた瞬間、気仙沼のフェリー乗り場が津波で流されていく映像が目に入り、飛び込んで来て、ショックで鳥肌が立ちました。携帯電話で同僚に電話をしてみました。全くとつがりません。当時、東京・町田市のあけぼの病院に勤務していた香川大学病院の後輩に連絡がつき、「東北へ医療支援する」部隊の編成をしてもらいました。一方、翌12日に僕は高松から家族のいる姫路に戻り、兵庫県立循環器センターでヨウ化カリウム750錠の提供を受けました。東北に帰るなら、福島原発事故による放射線被曝の対策が必要でした。13日朝、都内の東北大学

東京分室に行き、伊藤貞嘉教授(現・理事)と合流。あけぼの病院スタッフとともに東北自動車道を北上、その日のうちに仙台に到着。透析支援のシフトに入りました。14日の朝、災害対策会議に出席。その時点で東北大学病院は多数のベッドを空けて待っていたのですが、被災地からの患者は全然来なかった。いや来られなかった。石巻にも気仙沼にも重症患者はたくさんいたはずですが、道も閉ざされ移送手段がなかったんですね。「それならこちらから行くしかないだろう」ということで、僕がリーダーとなって、外科医、内科医、小児科医、薬剤師とともに、病院長公用車で石巻に向かいました。石巻に向かう車中で、メンバーに「トリアージとは？」といった救急の基礎知識を伝授。皆、救急をやったことがない若い医者ばかりを連れて行ったので、「何をしたら良いのか分からなかったら、とにかく困っている人を手伝え。物を運ぶだけでもいい」と発破をかけました。

石巻に到着すると……町の3分の2くらいが水没していました。石巻赤十字病院はまるで野戦病院のような状態。3交代のシフトに入って頑張りました。翌15日に東北大学病院から20人の医者が支援に来ることになり、16日朝、僕は仙台に戻りました。そして次に気仙沼に向け出発しました。

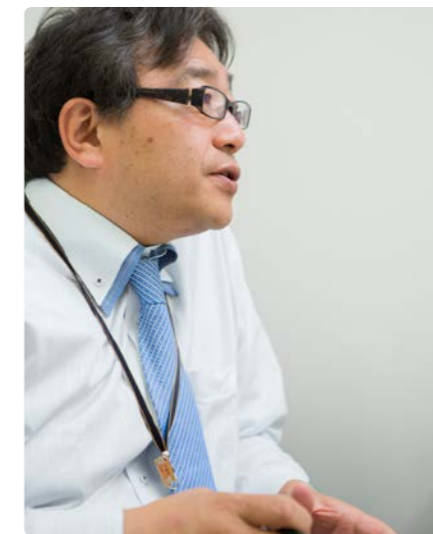
80人の透析患者を 北海道に移送

気仙沼市立病院は坂の上にあります。泥だらけの街をくるぶしまで泥に浸かり、歩いて坂を登りました。電力供給もなく薄暗い野戦病院のような状態。公立志津川病院や歌津クリニックなどが津波で流されたため、気仙沼市立病院には透析患者がどっと押し寄せていました。50床の透析ベッドに、透析患者は200人以上。その現場で忙しく立ち働く医療スタッフの3割が自身も被災していました。今

でも思い出すのは担当のU先生。「重症透析患者を陸路東京に搬送したんですが、途中的那須近辺で、車中で亡くなって……ご遺体が気仙沼に戻ってきました。もう限界に近い体制です。東北大から先生方が来てくれて本当にありがたい」と僕の手を握って礼を言ってくれるのです。彼は4人のお子さんがいて末っ子は震災直後に生まれたそう。しかしこの現場の惨状では、家に帰ることもできない。妻子を実家に避難させたくとも奥さんの実家は避難区域(福島の相馬)。仕事も家庭も本当に大変だっただろうと思います。

「このままでは救える命がますます危なくなる。透析患者を北海道に疎開せよ」ということが決まりました。北海道に移ってもらうにはご本人の意思確認が必要です。患者さん1人ひとりに時間をかけて説得しました。そして80人の患者さんを航空自衛隊東松島基地から自衛隊機に乗せて千歳基地まで移送したんです。一人ひとりカルテ代わりに、病状を書いた緊急タグのような紙を首からぶら下げてもらってね。患者さんは5月末まで北海道の病院に入院。6月に気仙沼に戻ってきました。

僕は5月いっぱい気仙沼で医療支援をし、



6月初旬に仙台に戻りました。あれから4年、現在に至るまで週に一度、気仙沼市立病院で医療支援をしています。

被災の傷跡が消えるまで 見守る決意

震災後、町を覆っていた泥は5月頃には乾いて粉塵が舞い上がるようになりました。それから、しばらくの間は「臭気」がひどかった。皆、マスクをして歩いていましたね。思えば、阪神・淡路大震災の時も粉塵がひどかったですね。僕の「災害の記憶」には「ほこり」と「おい」が結びついている……。

震災直後からずっと気仙沼に通い続けて、「気仙沼とともに在ること」が天命だと思っています。あの時、泥の中に浮かぶ病院にたどり着いた自分だからこそ、被災の傷跡が消えるまで気仙沼の方々を診ていくのが大切だと思うんです。吐きそうになるほどの臭気の中で頑張った経験を気仙沼市民と共有している者として、これからも見守っていきたくと思っています。

だから、僕の継承のフレーズは「宿縁を結ぶ」。思えば……香川でも仙台でも、そして気仙沼でも、土地と宿縁を結び、患者さんと宿縁を結んできました。それが自分の生き方だと、今は強く感じています。

[2015年4月30日。東北大学東北メディカル・メガバンク棟 清元研究室にて]

宿縁を結ぶ

継承の
phrase

清元秀泰：香川医科大学卒。医学博士。テキサス大学サンアントニオ校ヘルスサイエンスセンターフェロー、香川大学医学部助手・講師、香川大学医学部附属病院講師、東北大学病院腎高血圧内分泌科講師・准教授を経て、2012年より東北メディカル・メガバンク機構教授(地域医療支援室長、地域支援気仙沼センター長)。

Profile

以前は病院に行くと、お医者さんが手書きでカルテを書いていましたよね。しかし現在はパソコンによって書き込む「電子カルテ」にどんどん移行しています。その電子カルテを共有する「インターオペラビリティ(相互運用性)」が大切であることは以前から言われていて、世界はその方向に進んでいました。しかし、震災前、私たちはそれがいかに重要か、はつき

りと分かっていなかったんです。

東日本大震災後、カルテを流されてしまっ

INTERVIEW

中谷 純

東北メディカル・メガバンク機構 教授



ToMMo — 地域に寄り添うところ

情報をつなぎ、「命」をつなぐ。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

ていき、ついには亡くなってしまいうケースが多発しました。これは医療情報システムを研究・開発している私たちも想定できなかったことでした。

まず、すべての医療情報がすっぱりなくなるという事態を想定していませんでした。そして、すっぱりとなくなった結果、その患者さんに何が起るのかということをもまったく想像できませんでした……カルテがないために亡くなる患者さんがいる……私たちは、医療情報を喪失することが「患者さんの死」を意味すること、医療情報は患者さんの命そのものであるということ、震災によって、初めて、強く実感したのです。

そのような事態は今後、絶対に避けなければなりません。そのために「地震や津波が来ても情報を失わないこと」が一番重要です。つまり、情報のバックアップが重要となります。電子カルテ自体は日常的に有用ですが、遠隔地に大規模なバックアップを取ることはお金もかかりますし、平時には、あまり恩恵がありません。でも、やるべきなのです。

医療情報というものは「継承」していくことが何よりも大切です。平時には、自らの医療情報を個人が「継承」していくことで、健康が守られます。災害時には、自分の医療情報が外部に「継承」されていることで命を保つことができます。大きな災害が起こっても、自分の情報がどこかに継承されていれば、助かる可能性は格段に高くなるのです。

情報を継承することは、命を継承すること。私たちはそのことを心に刻み、これからも、災害に強い情報システム構築を進めていこうと強く決意しています。

[2015年4月28日。東北大学医学部・中谷教授室にて]

中谷 純: 北海道大学工学部卒。同大学院修了。工学修士。同大学医学部卒(医師)。同大学院修了。博士(医学)。IBM、MIT(マサチューセッツ工科大学)、東京大学医科学研究所客員研究員、神戸大学医学部助教授、東京医科歯科大学准教授を経て、2012年より、東北大学教授。2015年7月まで東北メディカル・メガバンク機構統合データベース室長。

Profile

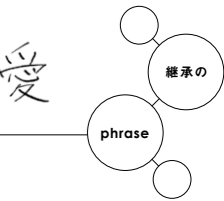
命を継承する

phrase



荻島 創一

東北メディカル・メガバンク機構 / 統合データベース室長



この地に「未来の健康」をもたらすために。

被災地の方々の健康を継続して見守り、体質や生活習慣にあった予防・医療を最初にお届けするために、私たちToMMoは未来型医療の研究を支える、確かな情報基盤を構築しています。

それは3つのシステムで構成されています。皆さんの健康調査をし、健康を見守り続けるシステム(健診・コホート情報基盤)、お預かりした情報を匿名化してバンクに保管し、バンクの情報から得られた知識を集積するシステム(メガバンク解析保存情報基盤)、未来型医療の研究のためにバンクを公開するシステム(バイオバンク公開情報基盤)です。

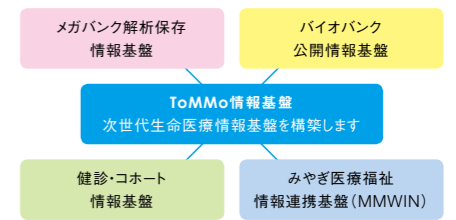
一昨年のコホート調査開始以来、ToMMoは血液検査結果、調査票への生活習慣の回答、遺伝情報などの情報をバンクへ保管し始めました。これから5年、10年、20年と皆さんの健康を見守り続けることで、膨大な量の情報が保管され続けます。お一人おひとりと向き合う予防・医療を実現するには、できるだ

け多くの情報に基づいた確かな知見を得る必要があります。皆さんからご提供いただいた情報が、膨大な量の情報となって、研究者の手を介し、未来型医療を紡いでゆくこととなります。

そのために、プライバシーを守り、高いセキュリティを担保したうえで、健康調査を宮城の医療情報ネットワーク(MMWIN)と協力して継続的に実施する情報基盤を構築しています。そして、遺伝情報も含めた膨大な情報を蓄積し、「体質や生活習慣と疾患の発症の関連」を見出し、得られた確かな医学的知識を集積する情報基盤を構築しています。これは世界的にも類をみない、最先端の試みです。

お子さん、お孫さんの世代のために、被災地の健康調査をし、克明に記録して継承し、地域に役立つ未来型医療を実現すること——東北の地に赴任して、妻と娘たちを連れて被災地を巡るたびに、その思いを新たに、情報基盤の構築に取り組んでいます。

ToMMo情報基盤概念図



荻島創一: 東京大学工学部卒、東京医科歯科大学大学院修了。博士(医学)。同大学助手・助教、ハイデルベルク大学定量システム生物学研究所(BIOQUANT)客員研究員を経て、2012年5月から東北メディカル・メガバンク機構バイオクリニカル情報学分野講師、14年10月から准教授。15年7月から東北メディカル・メガバンク機構統合データベース室長。専門は、トランスレーショナル・バイオインフォマティクス、システム生物学、医療情報学。

Profile

一般社団法人みやぎ医療福祉情報ネットワーク協議会(MMWIN)

MMWINは、宮城県の医療・福祉情報ネットワーク環境の整備と利活用を進めることで、医療の質や安全性を向上させるために設立されました。医師会・歯科医師会・介護福祉協会等が参加しており、県内の医療機関・介護福祉施設・保険薬局等の施設が加盟しています。加盟施設では、診療情報や介護福祉情報を電子化し、共有します。これにより、二度と医療情報等を失うことなく医療介護福祉支援が出来るわけです。また、このMMWINのサービスは、個人にもメリットをもたらします。複数の医療機関にかかっている場合に投薬・検査の重複を防ぐことができ、さらに、受診する施設ごとに何度も自分の病状に関する説明をする必要がなくなるのです。加盟施設にて、加入申込書を提出すればどなたでも登録することができます。ぜひ、ご登録ください。

医療情報の電子化

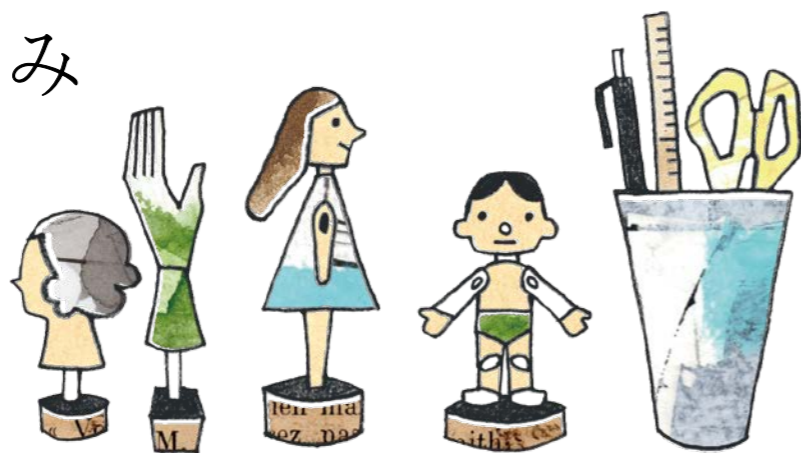
昨今、携帯電話をはじめ、身の回りの様々なものが電子化されてきました。医療の現場ではどうでしょう。病院にはオーダーリングシステムというものがあります。これは、薬剤の処方指示や臨床検査の発注などを医師が電子端末等を通して行い、病院内ネットワークを通じて各情報が薬剤部や検査部に届くというものです。昔に比べて、診療後の会計の待ち時間が短くなったのは、このシステムのおかげです。また、以前は紙のカルテに診療情報を書いていましたが、今ではパソコンで電子ファイルに入力する病院が増えってきました。しかし、カルテの電子化は日本ではまだまだ発展途上。欧州では北欧やオランダ、アジアでは台湾やシンガポールが進んでいます。米国でも、最近急速に進んできています。市民の健康を守るための大事な「電子化」、日本も負けてはいられません。

ビックデータ × 医療

最近、「ビックデータ」という言葉を耳にすることが多くなってきました。日本循環器学会によると、全国70万人の診療記録データを解析した結果、心臓が突然つまる急性心筋梗塞の入院患者は、男性では60代、女性では80代が最も多いことが分かったそうです。これは、今まで着目されていなかった「DPC(診療報酬の算定に使われる、患者の性別や年齢、治療法などが記録された診療データ)」を分析することで明らかとなったそうです。研究チームは、心不全や脳卒中のデータ解析もすすめているそうです(2015年4月25日朝日新聞朝刊より)。今までは、情報としては保有していたものの、使われていなかった膨大なデータ。今後はこれらが解析され、活かされることで、より良い医療サービスの提供につながることを期待されます。

Keyword

人間の都合、 遺伝子の企み



第3回

描くわたしと、描かれるわたし

長神風二 [サイエンス・コミュニケーター]

神の領域

人が神を思うのはどんな時だろうか。

長い日照りは、作物の実りに大きな影響を及ぼす。激しい嵐は、船荷の安全のみならず船乗りたちの命に関わる。大事なものを任せる天候は、自らの手でコントロールできない。人は古来、天候をなだめるべく、神に祈り、時に、捧げものを捧げてきた。

21世紀の現在、相変わらず人は気象をコントロールできないが、古代の神官たちを遥かに凌ぐ精度で天候を予測する気象予報士たちは、何も貢がれもしなければ大きな権勢をふるうこともない。気圧団と気流などが織りなすメカニズムの中にわたしたちは神を見ない。

21世紀、気象は、神の領域の外にある。

生命はどうだろうか。

子室に恵まれるかどうかなどは、現在もおみくじの一目目をなしているが、その要因に、具体的な神の姿を見ている人は少なからう。だが、漠然とかも知れないが、無事、丈夫な子が生まれますように、と人は祈る。人智をもって左右できない領域であることを受け入れ、その結果をどうにかする具体的な神を信じなくとも、よい結果を願って、人は祈る。そして、どんな子が生まれ育つだろうか、と思ひめぐらす。生命科学の爆発的な発展とも言えた20世紀の後半を経て、人は、誕生も、誕生した人

の性質も、未解明の要因が多いながらもDNAを中心とした物質の複雑な振る舞いの結果であることを知っている。

しかし、生まれた子の現実を、物質が織りなす偶然の結果に過ぎない、と多くの人が感じている、だろうか？

どんな子が生まれるか。無事に、丈夫に、というだけでなく、より具体的に。背の高さはこう、瞳の色はこう、髪質はこう。一つひとつの要素を選択していくことに、何か侵されるような感覚が巡るのはなぜだろうか。

生命は、21世紀になってなお、いまだ、神の領域の内側にあるのだろうか。

ゲノム編集のニュース

2015年4月、中国発の論文掲載のニュースは、否定的な衝撃をもって迎えられた。ヒトの受精卵に対して、ゲノム上の特定の位置の配列を、望んだ通りに置き換えようという操作を実際に行った、という論文。報告では、意図した場所以外にも操作の影響が及んでしまう不完全な結果に終わったとのことだったが、いくつもの国際学術誌から、倫理的な理由で掲載を断られ、科学界を超えて、米国政府ははじめ多数の否定的な反応を引き起こした。

今回、ヒトの受精卵を対象に用いられた技術は、2013年から報告され始めている、CRISPR-Cas9 システムというものだ。ゲノム上の特定の位置を望んだとおりに改変する、という技術は、ゲノム編集、と総称されるが、今回のCRISPR-Cas9 システムは、第三世代、と言われる。遺伝子組換えという、他の生物の遺伝子を導入する技術そのものは1970年代からあり、それが「ヒトのゲノムのような膨大なものの、特定の位置に特定のものだけを導入する」という形に洗練されて結実するまでに、40年の歴史を経た、というわけだ。

そして、今回の論文において、その技術は、ヒトの生殖細胞という次世代に遺伝情報をのこせる細胞において、行われたのだ。

可能である、ということ

ある生物でできることが他の生物ではできない、といったことは数多いが、このゲノム編集技術は、生物種による壁が非常に高い、という類のものではない。2013年にCRISPR-Cas9 システムが出た時点で、関係する研究者はこれが、早晚ヒトに適用可能になる、と考えたことだろう。そして、2015年4月の論文以降、この論文で明らかになった課題(目的以外の箇所も編集されてしまった)は、改良を重ねれば克服可能であろう、と多くの人々が考えている。そして、技術そのものに要する値段は高くない。何億円といった単位ではなく、実験に利用可能なヒト受精卵の入手と利用、という倫理的な困難さえ除けば、多くの研究室で可能な金額の範疇である。ヒト受精卵の遺伝情報は、編集可能なもの、になりつつある、と言える。

冒頭のとえに戻ろう。

周辺に人工降雨を起こして競技場周辺だけは何とか数時間の間だけ晴れを保つ、というような、ごく限定的なものを別にすれば、気象は、人にとってコントロール可能な何かになっていない。

一方、生まれてくる子が「どんな子であるか」については、そろそろコントロールしようと思えばコントロールできるものになりつつある。

誰が誰のために、そして重みについて

受精卵の遺伝情報を人工的に書き換えるとき、それは誰が誰のために行うのだろうか。

あなたはあなたの子どもを見て考える。望まない箇所は何か

あるだろうか。「直せる」としたら、何を直すだろうか。両親を想像して考える。彼らにとってあなたは、理想通りだっただろうか。彼らが、換えられる、としたら換えてしまうかも知れなかったあなたの中の部分はあるだろうか。友人の子どもについて考える。友人たちは、想定通りの子どもを産んだだろうか。

あるいは、重篤な遺伝病を負った子どもについて考える。両親からその病気を背負う可能性をうけるにあたって、そこだけならば、あらかじめ「直す」ことは願わずにいられないのではないだろうか。

考えていて息苦しいのは、親しくとも、家族であっても、自らが行おうとすることが他人の人生に、否応なく、相手が拒否できない形で介入していること、だからかも知れない。いまだ生まれていない人の、その人生を大きく左右することを決定しようとしている。

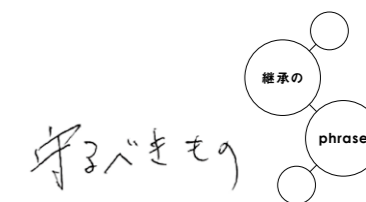
わたしたちは一部であれ、気象をこの手でコントロールできるようになった時、それは神の領域に立ち入ったように思うだろうか？ 複雑な気象を意のままにすることができたとして、その影響をこらむ人たちとあらかじめ話をするとはできるし、予想外の影響を与えたとしても、それについて話し合うとはできる。気象を変えることは、結果に対して何らかの形で対峙することができる。

誕生する人の命に対して、わたしたちはどこまで対峙できるのだろうか。影響を与えてしまったその人は、その影響の中でしか生きることができない。その影響について、その人がその人自身で考えることができるのは、20年後かも知れない。

今回の論文がひきおこした反応は主に、生殖細胞を編集することには、慎重であるべき、ということだ。少なくとも臨床応用についてはまだやるべきでなく、議論を成熟させるまで、保留しよう、と言っていることに等しい。尤もではある一方で、わたしたちは、このまま先延ばしすれば、未来から、「やろうと思えばできたのに、やろうとしなかった」ことで責められる岐路にも、間もなく立とうとしている。

神が退いた世界で、人は無責任でいられなくなる。

(東北大学 東北メディカルメガバンク機構 広報戦略室長)





[副機構長に訊く]

個人のゲノム、みんなのゲノム

呉 繁夫 [東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 (ToMMo) 副機構長]

INTERVIEW

突然ですが、「子供身長将来予測」ってできると思いますか……？ 子供が成人に成った際の身長を父母の身長から予測する式があり、かなりの正確さで子供の将来の身長が分かります。人の身長は遺伝的要素が大きいからですね。ところが、子供のすべての遺伝子(全ゲノムと呼びます)の塩基配列を読み、その配列を基に子供の将来の身長を予測しても、現時点では正確な予測は困難で、両親の身長からの予測の方が正確です。巷では、ビジネスとしてゲノムを調べて遺伝子診断をするサービスが始まっていますが、実は、ゲノムの塩基配列の本当の意味を理解するにはいたっていません。30億塩基対のありがたいお経は目の前にあるけれど、それを読んでも本当の意味が分からないというのが現状なんです。

私たちはゲノムから何を知ろうとしているのか

では、私たち研究者はヒトのゲノムを調べて、「何を」分かるように研究すべきなのでしょう。

うか？ ひとつには「社会が知りたがっていることを解明する」という研究の仕方があります。たとえば……今のところ、ゲノムを調べて性格判断をすることはできません。しかし将来、遺伝子検査サービスが普及したならば「ゲノムを調べると人の性格が分かるに違いない」と思う方は多いことでしょう。

ToMMoでは、すでに1000人の全ゲノムの塩基配列をほぼ決定しています。この「1000人ゲノムの解析」は3つのことを解明するのに役立つと考えています。ひとつめは、「病気の人のゲノムと比較すること」で病気に特有の変化を明らかにすることです。1000人ゲノムは日本人の標準的なゲノム配列なので参照パネルとして機能します。ToMMoが目標に掲げている個別化医療・個別化予防を実現するために、このひとつめの機能を使って研究していきます。二つめは「ゲノムと人の形質・バリエーションとの関連を調べること」。視力、筋力、肺機能など……まだゲノムとの関連が解明されていないヒトの性質を、1000人ゲノムを使って研究していくことは可能だと思っています。

すべての人類は誰もが「保因者」である

そして、三つめは「特定の病気の総患者数の推定に役立つこと」です。一つの遺伝子の変異によって起こる病気を単一遺伝子病とか、メンデル遺伝病と呼びます。あのエンドウ豆の遺伝で有名な「メンデル」です。単一遺伝子病は1万種類以上有ると考えられていますが、大部分は非常に稀であり、「難病」と呼ばれる疾患が多く含まれています。このように頻度の少ない難病の患者数を把握することは、困難なことが多い。患者数を把握することは難病対策において非常に大切です。なぜなら、患者数に応じて国や自治体が整備する医療体制が異なってくるからです。実際に稀な病気の全国総患者数を出そうとする時よく実施されるのが、病院を対象としたアンケート調査です。各病院の患者数を調べ、集計して、そこから「全国で何人いるか」を推定します。しかし、アンケートは100%返って来るわけでないし、そもそも「病気だけ病院に行っていない人」の数は分かりません。

この把握困難な患者数を、1000人ゲノムの情報を使うと、推定できる疾患があります。病気とゲノムの関係を考えると、優性遺伝の病気は、父親由来のゲノムと母親由来のゲノムのどちらか1本に変異があると発病します。劣性遺伝の病気は、父親由来と母親由来の両方のゲノムに変異がある場合だけ発病します。どちらか片方だけの変異では発病しません。劣性遺伝の病気において、「どちらか片方だけ変異がある」という人を「保因者」と呼んでいます。保因者は、次世代に変異を伝えますが、自身は病気になりません。1000人ゲノムの中にも多くの保因者が含まれています。ゲノムの塩基配列から特定の病気の保因者を見つけ出し、その数を明らかにし、その保因者数を基に患者数を割り出す研究をToMMoで行っています。ゲノム配列というものはそんな使い方もできるのです。

ちなみに、「保因者」は特別な人ではありません。実は、世の中のすべての人間は、数個の「特殊な病気に関わる変異」の保因者となっていることが明らかになっています。誰もが保因者なんです。劣性遺伝なので発病し

ないだけ。そう考えると「正常なゲノム」を持つヒトは、この世に存在しないわけで、特定の病気の人への差別などがいかに無意味なことが分かりますね。ゲノムの研究をしていると「人類は皆、似たり寄ったりだけど、よく見ると一人ひとりが違う」という当たり前のことにあらためて気づかされます。

ゲノムは公共性の高いものである

「ゲノムは究極の個人情報なので本人以外に公開などしてはいけない」という考え方があります。しかし、私たち、ToMMoは「ゲノムは究極の個人情報でありながら、同時に公共性を持つものでもある」という考え方でゲノムバイオバンクを構築しています(もちろん、匿名性は担保されたうえで)。個人のゲノムを比較すると99.9%以上共通しています。しかし、残りのわずかな部分で一人ひとり、違ってきます。この共通部分に着目するならば、人類に共通のもの、公共性を帯びたものと考えられるわけです。

2003年、初めて全ヒトゲノム解読が完了しましたが、膨大なお金とマンパワーがかかりました。当時、「それだけのお金があれば、たくさんの人を救えるのに」と思う人もいたはずですし、ゲノム研究に希望を感じて「どんなにお金がかかってもやるべきだ」と思う人もいたはずでした。しかしながら、このゲノム解読の成果を基に多くの病気の原因が次々に解明される現代をみると「大きな投資は決して無駄ではなかった」と実感します。人間は両親から半分ずつゲノムを受け継いでいますが、たとえば、お母さんから受け継いだゲノムがお母さんとまったく同じものかということ、実は100箇所以上で変異を起こしています。この「ゲノムは変異を起こす」ことは、生き物の多様性を維持していくためにとても大切なことなのです。「変わらず受け継がれていく継承性」と「新しく生まれていく多様性」の両者の理解が、病気の研究を含めたゲノム研究の本質と考えています。

[2015年5月13日。東北大学東北メディカル・メガバンク棟ミーティングルームにて]



フレーズ

[phrase] vol.03

2015.10 Issue

Tohoku Medical Megabank Organization

東北メディカル・メガバンク機構 広報誌

発行/2015年10月16日

編集発行/東北大学 東北メディカル・メガバンク機構

〒980-8573 仙台市青葉区星陵町2-1

Tel. 022-717-8078

<http://www.megabank.tohoku.ac.jp>



TOHOKU
UNIVERSITY

